

帳避人蒙被而臥、方其時大汗出大煩渴、飲湯水數十盃、小便亦稱之。先生診之、心下痞、腹中雷鳴、乃與半夏瀉心湯及紫圓、發則別服五苓散、大渴頓除、小便復常、續服半夏瀉心湯、久而癆減七八、爾後怠慢停藥。

〔安齋隨筆前編六〕一子癆。懷妊の婦人、月數重りて、俄に氣絶し倒れ、眼を見開き、瞳子をつり上げ、齒をかみ舌を出し、手足を揮ひ動し、そりかへり、人事を知らず、癱瘓やみの如くなるを子癆といふ、早く正眞の熊膽を濃く水にてときて口中へ入るべし、度々入れ、腹中へ納まれば、病しづまるなり、快くなるまで度々用ふべし、甚妙なり、予其效驗を直に見たる故、右の病する婦人の命を救はんと思ふ故、是れを記し置くなり、懷妊の婦人ある家には、かねて正眞の熊膽を求め蓄へ置くべし、急には得がたし、母に用ふる事なくとも、亦子に用ふる事あり、何も求め置くべきものなり、〔建殊錄〕越中醫、生某男、年三十所、發狂、喚叫妄走、不避水火、醫生頗盡其術而救之、一無其効矣、於是聞先生之名、詳錄證候、懇求治方、其略曰、胸膈煩悶、口舌乾燥、欲飲水無休時、先生乃爲石膏黃連甘草湯及滾痰丸贈之、服百有餘劑全復常。

〔金雞醫談〕一禪僧年三十所、發狂、語言誕妄、自稱釋伽、自稱達磨、兼患癱瘓、癆一月一發、或再發、發則苦楚呻吟、卒倒而不知人事、速則一時而痊、遲則二時許而蘇矣、諸醫皆謂、令扁鵲百診、倉公千治、不可得治矣、其法友有天雄師者、從余秀龍學和歌、舊知余治不凡、強請治余、診之、心下煩悶、胸肋妨張、乃爲小陷胸湯飲之、又作前後七寶丸與之、一歲餘而狂全愈、癆不復發、今在永平寺中、而稱首座云、

〔建殊錄〕京師智恩街紙舖政右衛門者、病後怯、畏障戶之響、其所抵觸皆粘紙條防之、居常飲食無味、百事皆廢、然行步不妨、但遇橋梁則乘輿猶不能過、百治無効、如此者凡三年、先生○吉益東洞診之上氣殊甚、脇下拘滿、胸腹有動、心中不安、作桂苓、朮甘湯及芎黃散、飲之數日、上逆稍減、又爲柴胡薑桂湯飲之數月、諸證皆除、居二三日、家召蓋匠、政右衛門正立廡下、自指揮脩葺、遇有不如意、走而上屋就之、而不